



TITLE:

<批評・紹介>支那史概説 上 岡
崎文夫著

AUTHOR(S):

内藤, 戊申

CITATION:

内藤, 戊申. <批評・紹介>支那史概説 上 岡崎文夫著. 東洋史研究
1936, 1(3): 275-277

ISSUE DATE:

1936-02-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/142934>

RIGHT:

岡崎文夫著

支那史概説上

この本の實物を見ない人の爲に一言して置くのだが、この概説は唐の終り迄しか無く、それ以後の部分は闕けて居る。この事は著者も自ら研究不十分の故を以て斷つて居られるから深く咎むべきではなからうが、讀者としては、支那史に於て最も興味ある轉換期の一つである唐より五代、宋にかけての移り變りが全然敘述されてゐないことはかなり不滿に感ぜざるを得ない。なるべく早い時期に於て著者の完全なる概説が世に現はれることを切望する所以である。

扱この書を一言にして評するならば、之は民族、王朝の盛衰興亡、國家、社會の變遷、就中政治の實際の有様並びに政策と之に對する輿論との關係を非常によく敘した書物である。著者の面目はこの點に於て最もよく發揮されて居ると思ふ。著者の扱はれた時代が著者をさうさせたのか、支那史の資料そのものの性質からさうなるのか、將又著者の興味が特にその點に注がれた結果なのか、私にはよくは分らないが、とに角私は讀んで居て著者の

この方面の敘述が最も活き／＼して居るのを感じた。殊に漢以後の部分に於てその感が深い。かゝる敘述は事實に對する鋭い洞察と問題に對する深い關心と理解なくしては到底なし得ない所であらう。無論著者は社會經濟的な方面や一般文化の方面に對しても深い注意を示して居られる。就中前者に對しては近時社會經濟制度を喧ましく論ずる人々の注文通りの型にこそはまつてはゐないかも知れないが、著者の高い識見はこゝにもよく表はれて居る。一般文化の問題では、唐に於ける法制の完備と南北兩朝の法制との關係や、唐の盛なる文化と唐朝の世界帝國的性質との結びつけ方などが勝れて居る様に思ふ。併し何と言つてもこの書の特色は民族や國家の治亂興亡の方面にあり、その複雑なる有様を巧に有機的に且整然とまとめ得た點にあると言はなければならぬ。この方面に於ける著者の洞察力の鋭さに對しては全く敬服の他はない。

以上述ぶる所は單なる私一個人の感想に過ぎない。今少し之を客觀的に觀てみよう。

著者は序に於て謂ふ。「余は支那史を以て、支那人乃至は漢族の生活の過程を其の成行に於て描寫することであ

るとの立場を取つて居る」と。この言葉は書中に於てもかなりよく實行されて居る。「其の成行に於て」とは仲々意味深長な言葉で、之は支那人の史觀が殆んど全て道德的であることに對する小氣味のよい反動として私には響くのである。「合目的な理念の開展と云ふやうな者は必ずしも認められない」ことも私は賛成である。併し乍ら歴史の流れ自身に目的がないといふことゝ、歴史を書く人に何等の目的觀念乃至は何等の價值觀念もないことゝは全く別の事である。實際に於ては著者は漠然たる帝國主義的立場を取つて居られる事が觀取出來るので（少くとも唐迄の所では）著者を以て無理想とするわけにはいかないけれども、この序文の如き立場は今日の我々には多少慚らぬ感がないでもない。今日吾々は果して如何なる立場に立つべきかに就ては殆ど五里霧中であると言つてもよい有様である。けれども從來の消極的な自由主義の立場に吾々が不満を感じて居ることは事實である。

次に著者は「漢族の生活の過程」を描寫すると言つて居られるが、この生活といふ言葉の内容が本文を讀んで見てもはつきりしない。例へば其上古時代に於ける内容と中世に於ける内容とでは大分違つて居る様である。而

も其違ひ方の間に之といふ統一概念が見受けられない。

その敘述の仕方迄が成行的の感がある。著者は支配關係、國家の興亡、政策と之に對する輿論即ち政治思想、社會制度などを中心として筆を進め、時折一般文化にも筆を及ぼして居られる。併しそれは正に及ぼして居られるのであつて、讀者は支那の文化のアウトラインを少しく知るのみである。文化に對する説明の如きも結局（狭い意味の）歴史的事情によつて爲されてゐるに過ぎない。時には、例へば佛教が何故六朝より唐にかけてしかく支那に於て興隆したかといふ問題に對しての如く、説明に窮して居られる場合さへもある。政治を論ずる場合の著者とは格段の不手際である。要之、政治經濟的な思想を除いた（狹義の）文化（思想、宗教、學問、藝術等）に對する著者の理解は幾分見劣りがする様である。惟ふに文化の問題は、それが非常に多く歴史的事情によつて左右され得る性質を持つて居るとはいへ、一度は之を政治等と切り離して考へ、それ自身の發展性をも見窮めた上、再び歴史的事情と相並んで理解すべきものではあるまいか。例へば上述の佛教の問題の如きも、單にその傳來並びに興隆の事情のみを追窮するに止らず、觀點を變へて、漢族

が有史以來始めて出逢つた、已より勝れた外來文化を如何に經驗したか、由來宗教的意識に乏しいとされて居る漢族が最初の勢力ある外來宗教を如何に消化したか、といふ風にも考へて見てはどうかと思ふ。かくの如く文化に對する理解の不足からして、時代區分の如きも讀者は、これが單に從來の如く王朝の興亡のみによつてゐないとはいへ、結局廣い意味に於ける國家、民族の興亡盛衰によつて爲されて居るに過ぎないといふ印象を受けるのである。

最後に蛇足ではあるが、この本は支那學の入門叢書と名づけられて居るけれども、私自身は實際は餘りいゝ入門書とは言へないと思ふ。資料の解説は成程かなり親切ではあるが、その他の部分は入門書といふよりは寧ろ奧義書といふべきであらう。大學を卒業したばかり位の人にはこの書の眞意は一寸直ぐには理解し難いかと思ふ。

以上淺學をも顧ず妄言を弄したが、いはゞ之は慾を言つたまで、今日既に世の中に出て居る數種の邦人の手になる東洋史概説中にあつてこの著は輝しい獨自の地位を有することはもとより言ふを俟たない。

(内 藤 戊 申)

殷墟發掘續報

昨年春期の國立中央研究院殷墟發掘團による安陽縣西北侯家莊に於ける殷代陵墓の發掘は更に昨秋九月より十二月にかけて、同じく梁思永主任の下に續行された。前期工作は、既に本誌創刊號に報道した如く殷帝王陵と推定せられる陵墓の構造の闡明、之に包藏せらるゝ一のフンドと見做すべき多數の新奇な器物の出土殉葬の風習を示す夥しい人骨の發見等に於て劃期的な成果を擧げたが、本期の工作は、大體前期の舊坑に就て更に徹底した發掘を行ひ、その結果を全般的に明瞭にし、尙若干の新發見を齎した如くである。五個の發掘陵墓中最大の物からは豊富な遺物が獲られ、其の四方の羨道よりは、巨大な甬、新奇な形式の盒等の銅器、及大理石造の猫、又その坑底からは高さ尺餘の大理石造猴及人物、精巧な玉盃、金鑲玉戈頭刀等が見出されたと云はれてゐる。中央研究院の手による發掘結果の公表を鶴首する。(小 川)